遙かなる聖戦

Glaray

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
遙かなる聖戦

【Ｎコード】
Ｎ２９２９Ｙ

【作者名】
Ｇｌａｒａｙ

【あらすじ】
西暦１０１５年における地上の女神・アテナと冥王ハーデスの聖戦。
著者オリジナルです。原作登場キャラは一切出てきませんのでご了承下さい。
基本的に設定は原作に忠実ですが、原作には登場しない星座の聖闘士や魔星の冥闘士が登場します。
原作と比較したりして楽しんで頂ければ幸いです。感想お待ちしております。

前兆　　Ｏｍｅｎ（前書き）

タイトル若干変えました。
今後全部こんなかんじで英語入れます。

前兆　　Omen

永遠に戻って来られぬやも知れない闇の中にいるのだと思った。
彼女は地面に倒れていた。
打ちのめされた様に、僅かに立ち上がる気力も眼を開く気力も無い。
しかし、「自分がやらなければ他に誰がやるのか？」という警告染みた言葉が突如脳裏をよぎった。
彼女は渾身の力で手を地面に付き、体をやっとの思いで起こし、眼を僅かに開く。
点々と続く血の跡。
それを這うようにして辿っていく。
血の滴がポタポタと零れ落ち、池を造っていた。
その上をやっと頭を起こして見上げる。
剣の切っ先であった。
彼女の額に滴が落ちた。

「もうこれで終わりだ」

声が響いた。
深淵から轟いている様な、恐ろしく低い、圧力のある声であった。
同時に、彼女の頭上に剣が振り下ろされる。
躱す術はなかった。

「きゃあああああ！！！」

彼女は自分の叫び声で目を覚ました。
石造りの寝台から勢いよく身を起こすと、窓から僅かに日の光が差し込んでいることに気が付いて胸をなで下ろした。暗闇の中に取

り残されていなかったからだ。
それにしても、今の夢は何だったのだろうか…　生々しい感覚がまだ残っており、動機がおさまらない。

「ア…アテナ！？」

突然、部屋の入り口の扉が乱暴に開き、入ってくる者があった。均整の取れた見事な長身に、割り方質素な布の服を着ている。豪奢だが芸術的な藍色の長髪を持つ美青年だが、その繊細な顔立ちは今狼狽してやや崩れている。

「…カライス？」

彼女一地上の女神・アテナは青年の姿を見て少し驚いた。自分はどれだけ大声で叫んでいたのだろうか…カライスはかなり遠くで寝ていたはずなのに。

「ごめんなさい、何でも無いのです。ただ…かなり怖い夢を見てしまって」

アテナは寝台から下りると、来訪者に向かって微笑みかけた。太陽の輝きにも勝る、温かく眩しい笑顔だ。
それを認めると、カライスは女神にも劣らない穏やかで優しい笑顔を浮かべて返し、丁重に跪いた。本来彼はこういう雰囲気の持ち主のようだ。

「それなら安心です。ただ、貴女のお声が余りにも大きかったので、一体何事かと」
「こんな事は、滅多に無いことですからね…。本当にごめんなさい。とりあえず、外に出て話でもしませんか」

「御意」

カライスは身を起こし、先に部屋を出た。アテナもそれに付いて行った。

歩きながら彼女は考えていた―嫌な予感がする。最近、教皇も玉座を外してよくスターヒルに登っているようだ…まさか。

聖戦　Holy War

「アテナ神殿」ーここは聖域（サンクチュアリ）と呼ばれる一帯で最も神聖な場所で、岩山の頂上にある。アテナを守る88人の聖闘士（セイント）の中でも最強を誇る12人の黄金聖闘士（ゴールドセイント）がそれぞれ守護を任された宮殿、更には聖闘士達を統括しアテナを補佐する存在である者の「教皇の間」を一つずつ突破しなければ神殿に辿り着く事はできない。それゆえ神話の時代よりただの一度も敵の侵入を許した事は無いのだ。

ここに「祀られた」女神とその守護者は巨大なアテナ神像の前にいた。開かれた右手に乗っているのは翼ある勝利の化身？ニケ、左手が添えられているのは聖楯イージスである。その荘厳で慈愛に満ちた姿はどんなに深い闇の中にも光明をもたらしてくれるようだ。

「あなたと初めて出会ってから、何年になるのでしょうか」

アテナはふと思い付いたように、カライスの方を向いて言った。

「13年です。あの頃、貴女は私の身長の半分位でしたね」

「そんなに小さかったかしら…」

カライスの言葉に、アテナは遠い昔に思いを馳せた。

人の身に生まれた地上の女神だと分かって聖域に連れてこられた時、彼女はたったの4歳だった。女神の栄えある近衛兼世話係に任命されたカライスは14歳であった。それ以来二人はずっと一緒だ。

「主人と家来」と言うよりは「妹と兄」と言った方が良いような、気の置けない間柄である。

「ゼテスに会った時は驚いたわ。あなたと全然見分けが付かなかったもの」

「私か兄か当てる遊び、しましたね。外したのは最初の一回だけでした」

カライスは懐かしそうに微笑んだ。

「ゼテスは馬鹿らしいと言わんばかりの態度だったわ」

「申し訳ありません…兄は生まれた時からああいう人なのです」

「いいの。だからあなたとゼテスの見分けが付くようになったのよ」

二人は声を立てて笑った。裏表の無い空間。彼女は束の間不安を閉じ込めて置けた。

教皇アトレウスは玉座の上で黙考していた。

昨晩老体に鞭打って登ったスターヒル－教皇以外出入りが禁じられている、地上で最も天に近い場所－での事が気掛かりであった。スターヒルは代々の教皇が吉凶を占う天体の観測所で、教皇は特にある一つの星に注目しなければならない－小熊座の尾の首星？北極星だ。

本来この星は、天頂より約1度離れた場所で輝いているものだ。しかし、250年に一度、その角度が0になる時がやって来る。その時、全ての聖闘士はアテナの為持てる力全てを尽くして戦わなければならない。例え命を棄てたとしても。

教皇が前回、前々回と北極星を観測した時より、今回は明らかにそれは天頂に限りなく近づいているのだ。

これでは、「その時」が来るのは時間の問題である。聖闘士の数も揃わないというのに…殊に、最下級の青銅聖闘士（ブロンズセイント）でも、神話の時代よりアテナの側に常にいて闘ったというあの聖闘士がいないのだ。

「失礼致します」

教皇の間の扉が、重々しい音を立てて開いた。

精悍な顔つきをした青年が一礼して入って来た。勇壮な長身には聖闘士の防具？聖衣（クロス）が纏われている。その色はまばゆい黄金色だ。

「山羊座（カプリコーン）のユバルホークか。如何した」

「実は、聖域北の遺跡の方角から、とてつもなく邪悪な気配を感じるという報告を受けまして…調査したいのですが」

教皇はぞくっとした。思わず声が大きくなる。

「黄金聖闘士達をここへ集めて参れ。話はそれからだ」

「…と申しますと…！？」

ユバルホークは気が付いたようだった。僅かに眉間に皺を寄せる。

教皇は頷いた。

「去る壮絶な戦いより２５０年…再び、冥王ハーデスとの聖戦が始まるのだ」

迫る時　The Time Is Near

小一時間後、教皇の間には八人の黄金聖闘士、そしてアテナとカライスがいた。二人は教皇が直接アテナ神殿まで行って呼んできたのだった。玉座の横にはアテナとカライス、正面に黄金聖闘士達が片膝を付いた状態で二列に整列した構図だ。普段滅多に顔を合わせることの無い黄金聖闘士同士が大勢で、しかもアテナと一カ所に居合わせるのは極めて希なことである。

「この度君達を集めたのは他でも無い…直に始まるであろう、冥王ハーデスとの聖戦について少し話があるからだ」

教皇の言葉で、その場にいる者全員に緊張の波紋が広がった。アテナは「やっぱり」という顔でカライスをちらりと見やった。カライスはそれに気づき、眼で返事をした。

「動かざる星・北極星、この星が天頂に来ると冥王との聖戦が始まるという。私はこの所スターヒルにて北極星の位置を観察し続けて来たが、それが天の中心に近くなる速度が急激に速まっているのだ。これでは、聖戦が始まるのは時間の問題…遅くとも、三ヶ月後かも知れぬ」

教皇はそう言って下を向いた。黄金聖闘士達の間でどよめきが起こる。アテナも思わずゴクリと唾を飲み込んだ。

「教皇…！」

「聖闘士の数もろくに揃っていないというのに！？」

「…承知しておる」

攻撃的な口調で言った者があったが、教皇は厳かにそれを制止した。教皇を批判するのは筋違いというものだが、教皇はそういう心境を察した。

「事態を予測できなかった私の過失だ、本当に申し訳なく思っている。しかし、聖戦はまだ始まってはいない。落ち着いて聞くのだ。確かに言う通り聖闘士の数が足りないのは明白だ、しかしそれを解決するのは焦りでは無かろう。今この場に居ない四名の内、三名が居ない理由を考えてみよ。聖闘士候補生の修行の為のはずだ。彼らが使命を果たすこと…直前まで、それを待ってみるのだ」

「…」

教皇の静かだが力強い言葉に、場は再び静まった。

「さて、本題だが、先程ユバルホークより伝達ががあった。聖域北方の遺跡群から強大な邪悪な気配を感じるという報告を受けたため、それについての調査をしたいとのことだ」

前列の一番右にいたユバルホークは、顔を床の赤絨毯に向けたまま首を縦に振った。

「無論調査を許可する。しかし一つ、あの遺跡群は前聖戦の冥王軍拠点ーハーデス城の跡である事は全員聞き及んでおろう」

場の沈黙は肯定を意味していた。

「‘跡’とはいえ、十二分に危険性を孕んだ場所であるのは間違いない。そこで、山羊座のユバルホーク、射手座（サジタリウス）のシルヴェラよ」

「はっ」

「何でしょうか」

ユバルホークと、後列左から二番目にいた者が顔を上げた。シルヴェラは小柄な、十代半ばと思われる少年だ。明るい茶色の短髪と大きめの瞳がまだ子供っぽさを残しているが、背に翼のある黄金聖衣を纏ったその姿には威厳さえある。

「私は、君達二人が適任だと判断した。異論の有る者は？」

声を上げる者は誰一人いなかった。

「それでは二人とも、頼んだぞ。聖域内の青銅聖闘士、白銀（シルバーセイント）聖闘士を何名か選び出し、早速調査に向かうのだ」

「御意」

二人は立ち上がって一礼をすると、入り口の巨大な扉を開けて退出した。

「残った六名よ、話はこの通りだ。冥王復活の兆しは見え始めてきた…君達は最強を誇る黄金聖闘士だ。しかし、その力を過信すること無く、日々精進してもらいたい。以上だ」

その言葉を聞き終えると、六人の黄金聖闘士達はおのおの立ち上がって教皇の間から退出し始めた。

ところが、その中で一人玉座の横に控えている二人の元へとやってくる者があった。

「兄さん」

カライスはやや驚いたように、その人物の顔を見据えて呟いた。見事な長身、優美な藍色の長髪、そして繊細で彫刻の如き顔立ちは

カライスと一部たりとも違わない様に見えた。ただ、その身に纏う雰囲気は峻烈を極め、カライスの温和なそれとは全く質が異なる。

「俺は自分の宮を守るのが仕事かもしれん。だがカライス、何かあった時真っ先にアテナを守るのはお前の仕事だ。…これからも頼むぞ、我々の女神を」

それだけ言うと、カライスの生き写しは身を翻して扉の方へと歩んだ。言い方はぶっきらぼうであったが、どこか優しかった。

「…ありがとう、ゼテス兄さん」

カライスは微笑み、兄に向けてそう言った。アテナと教皇が、視界の端で頷いているのが見えた。

ユバルホークとシルヴェラは、白銀聖闘士三名と青銅聖闘士二名と共に聖域北部の荒野を進んでいた。
本来なら年齢的な面でもユバルホークがリーダーとして行動するのが妥当なところだが、一行を先導しているのは意外にもシルヴェラであった。聖衣の背の翼のせいで、走っているというよりも飛んでいるように見える。

「シルヴェラ、ちょっと速過ぎないか。付いていけないぞ」

シルヴェラの後ろをやや遅れてついて行っているユバルホークが、他五人の気持ちを代弁するかのように言った。

「分かりましたって」

反抗期の子供染みた返答をすると、シルヴェラは羽ばたきの速度を遅くした。概して黄金聖闘士は俊足だが、シルヴェラの足の速さは群を抜いている。足が速い方のユバルホークでさえ付いていけないのだから、まして他の者は尚更だ。

「ライノ、遺跡の方角から邪悪なものを感じたのは、朝になってからいきなりか？」

ユバルホークは一番後ろを走っている少年に前を向いたまま声を掛けた。彼はユバルホークの弟子で、一角獣（ユニコーン）星座の青銅聖闘士だ。朝異変を感じたことを師に伝えたのはライノである。

「正確には、昨日の晩ロドリオ村にいた時に感じたんです」

ロドリオ村は、聖域に最も近い村だ。教皇アトレウスもよく表敬訪問している。聖闘士には馴染み深い場所だ。

「…一緒に居たアンキセスも、何か感じたと言っていました。けれど、割と一瞬の事だったので、言うのはそんなに急がなくてもいいかなと思って…」

罪悪感を感じたのか、ライノは言葉を切り明るい水色の瞳を曇らせて下を向いた。隣を走っている大柄な少年ー大熊座（ベアー）のアンキセスもうつむいている。しかしユバルホークの対応は穏便だった。

「そういう事は、自分で判断せずにすぐに俺達に伝えるんだ。もしかしたら、重大な事かも知れないんだからな。…だが、言ってもらえた分には良かったぞ。ありがとう」

「は、はい！」

少年達の表情はぱっと明るいものに変わった。

「隊長、おかしいと思いませんか」

何分かして、そう言ったのは白銀聖闘士・蛇遣い星座（オピュクス）のエリンナだった。一行の紅一点で、有数の実力とすらりとした肢体の持ち主だ。黒髪緑眼の美女だが、「女性聖闘士は仮面を付けなければならない」という掟に従ってその麗しい顔を隠している。

「何が？」

シルヴェラが返事をした。ちなみに、「隊長」という呼称はシル

ヴェラがユバルホーク以外の全員に強いたものであるが、五人とも乗り気で使っている。

「遺跡が全然見えて来ませんね。そこまで遠い場所でも無いはずなのに…」

「あ…言われてみれば、確かに」

遺跡は聖闘士の足なら二時間もかからないような距離にある。しかし、もうかれこれ一時間以上は走っているのに、影形も見えてこないのだ。

どういう事だろうか。

全員がそう思った矢先、先を行くシルヴェラの姿が忽然と消えた。

「隊長！？」

白銀聖闘士、青銅聖闘士の五人はうろたえて足を止めた。

眼前はただのだだっ広い荒野で、遙か向こうに町の建物が見えているばかりだ。

シルヴェラの気配も影も無くなっている。

「何処へ行ったんだ…？」

ユバルホークも足を止めて辺りを見渡し、そう呟いた。しかししばしの間考え込んだ後、躊躇無く再び走り出した。

「大丈夫だ。行くぞ」

後ろを向いて、手で「まっすぐ行くぞ」と合図をする。

「え？」

「保証はする」

困惑している五人をよそ目に走っていたユバルホークの姿も消えてしまった。

「全員着いたね」

シルヴェラの声だった。彼は倒れた柱に乗って五人の方を見ている。ユバルホークも、もともとは此処にあった建造物の入り口だったと思しき場所に立って待っていたらしい。

五人は、このほとんど岩石の土台と崩壊した柱以外に何も残っていない場所が、一行の目的地であるということはすぐに理解できた—しかし、一体どうなっているのか。

「ここには、結界が張られている」

五人の心の内を見透かしたようにユバルホークが言った。

「ちょうど、聖域全体に張られているやつの様なものだ。普通の人間にはその存在すら知覚する事の出来ないように施された—少しものが違うが、そんな所だろう」

「なるほど、それで遺跡が外からは見えなかったんですね。そして、隊長が消えたのも…」

「そうだ。結界の中に入ったからだ」

合点がいった背の高い白銀聖闘士の少年・ペルセウス座のレイファートにそう答えると、ユバルホークは何時にも増して深刻な顔になった。

「…しかし、最近になって急に此処に結界が張られるとは…やはり、冥王復活の前兆なのだろうか。それに、この邪悪な小宇宙(コスモ)…」

遺跡の上空を覆っているのは暗雲で、結界の外の爽やかな朝の空とは全く違っていた。今にも豪雨が降り出すか雷鳴が轟きそうである。そして、場所全体に充満しているのは気分を害するほど強烈な邪気であった。例えるならば何者かの憎悪ー怨恨を思わせるような。

「あれは、何だろう？」

不意にシルヴェラが柱の上からそう言った。その眼はかなり広い遺跡の中心方向を見ていたが、そこから尋常では無い邪気が発せられているのが全員に分かった。

「行ってみようか」

シルヴェラは柱から軽やかに飛び降りると、視線の先へと向かった。他の六人もそれに付いていった。

「これは…」

一本の剣だった。

円形になった、祭壇の様な部分の中心にしっかりと刺さっている。銀色と言うべきか、闇色と言うべきか、荒廃したこの遺跡の風景には似つかわしくない程の光沢を放っている。刀身には神秘的な文字が彫ってあり、その柄の部分には血の赤をした宝玉がはめ込まれている。

しかしそれは美しいという以上に、何か生々しく毒々しい雰囲気を醸し出していた。事実、邪気はここから発せられていた。

「剣…？」

シルヴェラがそれに近づいた瞬間。

「うっ！？」

剣を一瞬包んだ暗黒の結界によって、シルヴェラは吹っ飛ばされた。

地面に背中を叩き付けられる。

「シルヴェラっ！！！」

「俺は大丈夫…だけど、聖衣を着ていなければ、大惨事に違いないよ…！」

ユバルホーク始め、六人が倒れたシルヴェラに駆け寄った。怪我をしていないとはいえ、相当痛そうに顔をしかめている。

「今の衝撃は、一体…」

「それはハーデス様のご意思の強さです」

「！？」

一行の背後から声がした。振り向くと、そこに立っていたのは女だった一つややかなぬばたま色の長髪、漆黒のドレス、黒く塗られた爪一妖艶なうら若い女であった。

しかし、真っ先に覚えたのは戦慄だった。

「何者だ！」

ユバルホークは手刀を構えて一喝した。シルヴェラも立ち上がり、

聖衣の背から黄金の弓矢を出し女の心臓向けて番えた。
女はその牽制をものともしないかのように言い放った。
「私はパンドラ。冥王ハーデス様の下僕にございます」

闇の剣　Sword in the Darkness（後書き）

いよいよ次話戦闘シーン&冥闘士ーただしオリジナルーの登場です。
乞うご期待！

幽冥の徒　Ｓｐｅｃｔｒａｌ　Ｏｎｅｓ（前書き）

更新遅れて申し訳ありませんでした…
では早速第五話です。

幽冥の徒　Spectral Ones

黒一色の装いの女・パンドラは、いつの間にか剣の傍へと来ていた。

「…！？」

最大限の警戒をしていた筈の黄金聖闘士二人にも、彼女が何時動いたのかわからなかった。

聖闘士達は皆一様に驚くばかりだった。

「この剣はハーデス様の剣。地上におけるハーデス様の依り代となるお方だけが、これを抜くことが出来ます」

パンドラは剣の柄に優しく触れた。

「そして、このパンドラこそがその人物を此処へ導く役目を仰せ遣ったのでございます」

言い終えて手を剣から離すとゆっくり歩み出し、自分に拳、あるいは矢を向けている相手に近づいた。

ユバルホークもシルヴェラも、他の五人も、何も出来なかった一それは、パンドラが非力な女性だからという理由ではない。ただ、彼女が自分達の思考も行動も全て抑圧する何かを醸し出していたからだ。

「ハーデスの依り代だって？」

張り詰めた空気に一石を投じようとしたのはシルヴェラだった。

「そうです。地上で最も清らかな魂を持つ少年ーハーデス様はそれを好まれます」
「あんたはそれを探して連れてくるんだよな？」
「そうです」
「だったら、今ここで…」

ユバルホーク始め六人が息を飲んだ。シルヴェラの弓を引く手が強くなる。しかしパンドラは相変わらず淡々としていた。シルヴェラはただ強がっているだけとでも言うように。

「ええ、殺せば良いのです」

パンドラは表情一つ変えず、そうとだけ言って艶めかしい唇を閉じた。

「…っ」

シルヴェラは矢を番えたまま放つことが出来なかった。放つことが無意味だと直感したのだ。

「…さて、ハーデス様は強く願っていらっしゃいます」

パンドラは、硬直している七人の間を悠々と通り抜けて語り始めた。

「一刻も早く、ご自分の魂の器を、そしてそのお住まいを手に入れ、今度こそ全てを終わらせることを」

突如、辺りの風景が揺らぎ、壮大な城の内部と化したーあたかも

最初からそこに城が存在していたかのように。崩れた柱も土台だけになってしまった広間も影すら残していない。

「これは、一体…？」

しかしその景観は七人が周囲を見回すとまもなく蜃気楼の如く消え失せ、また元のように石造りの遺跡があるばかりだった。

「幻か！？それにしては…」

「幻ではありません。これは半ば精神の存在にして半ば現実の存在たる‘ハーデス城の記憶’です」

ケンタウルス星座のユングビィの言葉をパンドラが遮った。

「記憶だと…神の記憶は、尚も留まり実体を持つとでも言うのか！？」

このときユバルホークが言った事は全員の思考を反映していた。

「その通りです。ハーデス様のご意思の強さ―あの剣に宿るハーデス様のご意思の強さが、この空間を造り上げているといっても過言ではありますまい」

そういってパンドラが剣の方を指差すと、剣からまたシルヴェラを拒絶したような結界が束の間出現し、消えた。バチバチと電撃が迸るような激しい音が弾け、剣の刺さった部分の石が砕けて消滅した。シルヴェラは誰より真剣な顔でそれを見つめ、冷や汗が背中を伝うのを感じていた。

「そのご意思の強さとは―そこまでハーデス様が心を砕かれてい

らっしゃる事とは。…おわかりでしょう？」

最後の何でも無いような言葉が、七人の心に衝撃を与えた。
パンドラは笑った一余りに美しく不気味に。
そして、懐から小さなハープを取り出した。
それを奏で始める。

「…」

七人の聖闘士達は、幻想的だが迷宮を彷徨える錯覚を覚える、不可思議な旋律の中凍り付いていた。
相手を牽制する形のまま、ユバルホークとシルヴェラ達はそれ以上の行動に至ることが出来ない。
女一人に優位に立たれるのは恥だとは、微塵も思えなかった。
それどころか、何だ、この今まで味わったことの無い、恐怖と畏怖の入り交じった感覚は一！

ものの数分間の後、パンドラは一番細く短い弦を強く弾いた。
透明で破壊的な音が淀んだ空気を震わせる。
次の瞬間、七人は異様な緊張状態から解放された一
一がしかし、すぐさま新たな緊張状態に入る。

「お呼びでしょうか、パンドラ様」

虚空より声がした。そして闇より、亡霊の如く一つの影が現れる。
闇に溶け込まんばかりの全身を覆う鎧の色、マスクから覗く白い秀麗な顔、黄金聖衣のように輝く長い髪が強烈な対照性を成す。
そうしてパンドラの横まで歩み出てくると、すでに臨戦態勢に入っている聖闘士達の姿を認め、ふっと笑った。

「…！！！」

七人の全身を何かが駆け巡った―
こいつは、とんでもなく強い。
それも、黄金聖闘士級…！

「それは…」

口を開いたのはユバルホークだった。

「…冥界の深淵と死を宿す、聖衣と対極の存在・冥衣（サープリス）―お前は、百八の魔星に選ばれし冥王の戦士、冥闘士（スペクター）が一人か！！！」

漆黒の男は不敵な微笑を浮かべたまま返す。

「そうだ。そして俺は、高邁なる天星に選ばれし、天慧星シムルグのテイレシアス」

幽冥の徒　Ｓｐｅｃｔｒａｌ　Ｏｎｅｓ（後書き）

前話の後書きで「次回バトル」と書きましたがすみません、詐欺でした…（汗）
次話では本当にバトルになるので、ご了承願います。

暗黒の霊鳥　Darkened Simorgh（前書き）

やっとこさバトルシーンです。
結構がんばったんですがやはり駄文ゆえ、申し訳ありません…（泣）

暗黒の霊鳥　Darkened Simorgh

「天慧星シムルグだと…！？」

「天慧星の冥闘士…！」

ユバルホークとシルヴェラは息を飲んだ。冥闘士の宿星・百八の魔星は３６の天星と７２の地星に分けられ、その中でも、天星の冥闘士は特に強大な力を持つと言われる。冥闘士最強の「冥界三巨頭」の宿星は天星だ。

「テイレシアスよ。青銅二人に白銀三人、それに黄金二人…ハーデス城の下に埋める人柱、またはその首を直接ハーデス様に献上する生け贄としては悪くないでしょう」

パンドラはハープを懐にしまうと、身を翻しやや語気を強めていった。

「冥闘士の中でも屈指の実力を誇るお前なら、全員血祭りに上げられるはずです」

もうその姿は闇の中に消えていた。

「御意…」

冥闘士はそう呟くと、冥衣の背から二枚の鋭角的な翼を出して空を切った。

「！！来るぞ！」

ユバルホークが叫ぶや否や、凄まじい突風が起こり七人の足を揺らがせる。

「まずはその、青銅（ブロンズ）のデカブツからだ…！！！」

テイレシアスの拳がアンキセスの大きな体躯に迫る。突風に耐えるため両腕を交差させた姿勢のまま、アンキセスは動くことが出来ない。

「アンキセス！！！」

暴風の中、真っ先にライノが身を躍らせた。

「くらえ、‘ユニコーン・ギャロップ’！！！！！」

ライノの足から目にも止まらぬ速さで無数の蹴りが繰り出され、敵の拳をすんでの所で弾き返す。テイレシアスは形の良い唇を無造作に噛むと、宙で一回転して七人の後方に降り立った。

ひとまず風は凪ぐ。

「すまねぇ、ライノ…」

「こういう時は、お互い様だ…！」

申し訳なさそうに言うアンキセスに、ライノは汗を拭って答える。攻撃を当てるだけで精一杯だ。

「青銅にしてはやるようだな、一角獣座（ユニコーン）…」

「感心している暇は無いぞ、冥闘士（スペクター）！」

不敵に言うテイレシアスだったが、間髪入れずに今度はユバルホ

ークが飛びかかった。

「喰らうがいい、‘聖剣（エクスカリバー）’！！！」

研ぎ澄まされた剣の如く、鋭利な手刀が空を裂いてテイレシアスに襲いかかる。

「！！」

テイレシアスは瞬間的に身を仰け反らせ、致死の斬撃を免れた。

しかしそれも束の間、第二撃目、第三撃目とユバルホークが舞うように手足を繰り出す。

鋼鉄の剣の如く鍛え上げられたユバルホークの手足は、触れたもの全てを切り裂くと言われる程強力だ。その全てを余す所無くお見舞いした暁には、いかなる敵であろうとも肉片と金属片の塊となる一そうとさえ言われている。

しかしテイレシアスが最初の一撃を躱したのはまぐれではなかった。

まさに刹那の間を縫って、完璧に斬撃を避けている。

背後で地面がユバルホークの拳圧により割れる轟音を聞きながら、テイレシアスは口元に笑みさえ浮かべていた。

「全て躱すか…！」

「思ったより遅いな、山羊座（カプリコーン）」

余裕に満ちたテイレシアスの態度に、ユバルホークは歯ぎしりした。

冗談じゃない…黄金聖闘士でもシルヴェラに次ぐ速さを誇る俺の拳を、避ける余地がまだあるとでも言うのか！？

「今度はこちらから行くぞ、！！！」

テイレシアスの両手の中で圧縮された空気の弾丸が形成され、ユバルホークの腹部を直撃する。

「ぐおっ…！」

腹が潰されるような痛みに悶えながら、ユバルホークは後方に吹っ飛ばされた。

ズシャアという音を立てて聖衣と地面が摩擦する。

「先生！！！」

「ユバルホークさん！！！」

アンキセスとライノがすぐさま駆け寄る。

続いてエリンナとユングビィが飛び上がり、上空から同時に攻撃を仕掛ける。

「私達が行くわよ、‘サンダークロウ’！！！」

「‘フォーティアルフィフトゥラ’！！！」

爪から迸る電撃と炎の渦とが、漆黒の鎧を危険な輝きで照らす。

絶対に避けられる距離ではない。

「ふん…」

テイレシアスは一歩も動かなかった。

その代わり両手を広げる。

「‘ミラージュ・スフィア’！」

テイレシアスの周囲に陽炎のように揺らめく球体膜が出現し、霧も同然に攻撃を消し去った。

「な…私達の攻撃を…」

「膜一枚で無効化するだと…！？」

二人はうろたえた。自分達は時に黄金聖闘士にも迫る力を持つ白銀聖闘士ー実力があることを自負していた。それなのに、薄っぺらい膜一枚でこうも簡単に攻撃を防がれるとは…

「貴様らの攻撃など、これ一枚で十分」

涼しい顔で球体膜を消しながら言った冥闘士の言葉に、白銀聖闘士二人の自尊心と自信が傷ついたのは言うまでもない。

「次は俺だ！！！」

状況を打開すべく動いたのはレイファートだ。

「直接的攻撃が効かないとしても、このメドゥサの眼からは逃れられまい！」

身に纏うペルセウス座の聖衣の背にある、その目の見つめたものを石と化す禍つ盾「メドゥサの盾」を左手に装着する。

「‘ラスアルグールゴルゴニオ’！！！」

盾の中心に浮かんだメドゥサの目が怪しく光り、その光がテイレシアスの網膜に飛び込もうとする。

しかし半瞬にも満たぬ間、テイレシアスの両腕が唸り空を裂いた。
黄金聖闘士以外にそれを見切れたものはいなかった―しかし彼らにもこれを防ぐことはかなわなかった。

「‘ヴァニティ・スリット’！！！」
「なっ…ぐあああああああーーー！！！！！」

大気が聖剣（エクスカリバー）の乱舞となって盾をこまぎれにし、レイファートの体を聖衣ごと切り裂いた。
レイファートは絶叫と共に、自らが降らせた血の雨を浴び、自らが造った血の池に倒れ込む。

「レイファート！！！！！」
「レイファートさん！！！！！」

六人の聖闘士が同時にのぼせた声を上げる。
冥闘士は意にも介さない様子で言い捨てる。

「フッ…ここは不完全とはいえハーデス様の結界の内。貴様ら聖闘士は弱体化しているのだ。黄金（ゴールド）はまだいいとして、白銀（シルバー）や青銅（ブロンズ）如きが俺の相手になるか」

六人ははっとした。ハーデスの結界による弱体化…そうか。聖闘士の中でも有数の実力を誇るエリンナやユングビィ、さらには黄金聖闘士であるユバルホークの技が全く通じないなどということは普通はあり得ないのだ。まして、レイファートがこんな風にやられてしまうという事も…
しかし、少なくとも黄金聖闘士の二人は気づいていた。
この男―テイレシアスはどっちにせよ強い。なにしろ、全く本気

を出していないのだから。

水面　　The Surface（前書き）

聖域にちょっと戻ります。
今回は、「冥王神話ネクストディメンション」のネタを使わせて頂きました。

水面　The Surface

同じ頃、聖域（サンクチュアリ）にて―

「アテナ、お持ち致しました」

重い扉を開けて教皇の間に入ってきたのは、大きな白銀の杯（さかずき）を両腕で抱えたカライスだった。

杯はかなり長身であるカライスの半分以上の高さがあり、ゴブレットを巨大化させるとこのような感じになると言えば適当であろう。表面には文明や年代を特定しかねる精巧な装飾が施されている。中には清水が器八分目に注がれていた。

カライスは杯を教皇の座す玉座の前にそっと置いた。

「ご苦労だった、カライス」

「お疲れ様」

教皇とその傍に控えているアテナがカライスをねぎらうと、彼は一礼をした。

「では、教皇」

アテナが教皇を催促し、自分も杯の元へ歩んで行った。教皇は立ち上がり、アテナの近くまで行くと、法衣の袖から二つの物を取り出した―黄金の短剣と純白の長い布だ。

教皇は布をカライスに手渡すと、鍔と柄にそれぞれ翠と紅の宝玉がはめ込まれた美しい短剣をしっかり握り、アテナの手首をそっと掴んで腕を持ち上げる。

「アテナ、貴女を傷付け申し上げることを、大変心苦しく思います」

苦渋の決断なのだろうか、教皇は声を絞り出すように言った。しかしアテナは心からの温かい微笑みを浮かべて返した。

「遠慮なさらずに。ここでためらって、後悔はしたくないはずです」

「…御意…」

アテナの細くて白い腕に、黄金の短剣が垂直に突き立てられた。そして、ゆっくりと横に溝を掘るように切り込まれる。

刃が鋭過ぎたのか、アテナはそれ程痛みを感じてはいない様子だった。しかし、流れ出した血の量は結構なもので、杯に湛えられた水に次々と赤い小さな滝が流れ込む。血が混ぜられた水は、濁るどころかその清澄さを増して行っている。

ある程度の血が杯に注がれると、頃合いを見計らってカライスが布をアテナの腕の傷口に丁寧に巻き付けた。

一８８の聖闘士最強を誇る黄金聖闘士に、時に迫ることが出来るだけの力を白銀聖闘士は秘めている。しかし、白銀聖闘士と青銅聖闘士の実力差は天と地ほどもあると言われる程だ。

青銅聖闘士の纏う聖衣にはしばしば特殊な力の備わったものがあるが、白銀聖闘士の聖衣にそのようなものは殆ど無い。これは、白銀聖闘士の力は「何か他のものの力を借りなくとも十分である」とされているからである。

しかし、例外は存在する。

杯座（クラテリス）の聖衣もその一つだ。

これは、遥か神話の時代に戦場でアテナの喉の渇きを潤した杯が元になっている。それ故、今でもこれに汲んだ水は聖なる力を得て

飲んだ者、触れた者を癒やすのだ。
アテナは聖域北部の遺跡へ調査に行った聖闘士達の身に万が一のことがあったらと案じ、負傷者の為の聖水を用意してはどうかと教皇とカライスに提案した。勿論両者とも異論は無く、カライスは身に纏う者のいない杯座の聖衣を聖衣保管庫から持ち出して聖域の噴水の水を汲んできたのだった。
その聖水にアテナの血を混ぜたのは、彼女の血に宿る神の聖なる力が更に治癒の効果を高め、傷が癒えるのを早めてくれるからだ。
また、この水は決して劣化したりしないので今回使うことが無くとも後に取って置く事が出来る。
アテナは「杞憂ならいい」と言っているが、実際には杞憂では無いのだった。しかし今それを知るのは遺跡にいる者以外に無い。

「アテナ、この度の御心遣い、誠に有り難く存じます。どうか戻って、ゆっくりお休み下さい」

黄金の短剣に付いた血を杯の水で洗いそれを法衣の袖にしまうと、教皇はアテナに深々と頭を下げた。カライスもそれに倣う。

「分かりました。ではお言葉に甘えます」

アテナが一人で教皇の間から出て行こうとすると、カライスが心配そうに言った。

「お一人で大丈夫ですか。私がいなくても…」

アテナはカライスの声とは対照的に朗らかに笑った。

「過保護ね、大丈夫よ」

その声が終わったときにはもうアテナの姿は扉の向こうに消えていた。

「貧血で倒れたりしないといいのですが…」

カライスの不安そうな呟きに今度は教皇が笑った。

「カライスよ、お前がアテナの近衛として立派に務めを果たしているのはよく分かるが、アテナに自立して頂かないと困るのだぞ」

「勿論承知してはいるのですが、もしもの事があって後々聖戦にまで響いてくる事が無いとは言い切れますまい」

「お前の言う通りではあるがな。何かあったら、双魚宮にいるグレーシャが気づいてくれるだろう。気を揉み過ぎるな」

「むうっ…それもそうですね」

カライスは得心のいかない様子で首を軽く縦に振ると、杯座の聖衣を脇に避けようとしてしゃがみ、両手で抱え込もうとした。

すると、聖衣の中に満たされた水が彼の目に入った。

なんと清らかな水だろうか…透明よりも澄み切った色の聖水に、カライスはじっと見つめた。器の底まで見通せるくらいだ。

ふと、水面(みなも)が揺らいだ。

其処に映っているのは、当たり前だが自分の姿だ。…

…いや、違う。これは…！

「どういう事だ…？」

カライスは心の中で独語した。そして自分の近くに誰か居ないか見回した。一誰も居ない。教皇は既に玉座に着いていた。

そういえば、杯座の聖衣に汲んだ水の水面には、覗き込んだ者の未来が映し出される事もあるという伝説を聞いた事がある。では、

やはりこれは自分の姿なのだろうか。まともに考えてそんな筈が無い…がしかし…。

「如何したか、カライス？」

水面に訳ありげに見入っているカライスの様子を不審に思ったのか、教皇が声を掛けた。

カライスはふっと現実に戻ると、杯座の聖衣を両手で抱えて立ち上がり答えた。

「いえ、この聖水を保存しておくのに相応の器がいくらか必要と思いまして。いつまでもこの聖衣に水を溜めておくのは色々と調子が悪いでしょう」

「おお、そうだな。もしかすると杯座の白銀聖闘士が誕生するやも知れぬしな」

その場で思いついた返事ではあったが、理屈は通っているので教皇は納得していた。

カライスは本当の事を答える事は、なんとしても無理だった。―水面に映っていたのが教皇の法衣を身に纏った「自分」であるなどとは、恐れ多くてとても口に出来なかったのである。

戦略的撤退―？　Strategic Retreat ―？（前書き

ちょっと長くなりそうなので前半と後半に分けます。

戦略的撤退―？　Strategic Retreat―？

聖域北部の城跡を覆う邪悪なる結界の中には、地上の女神（アテナ）の慈愛の光など一筋も差し込まない。そこに居る聖闘士達、そして彼らを死への供物にこしらえるべく冥界より遣わされた使者を一様に照らすのは、冥王（ハーデス）の闇の栄光であった。

「エリンナ…ユングビィ…！！！」

シルヴェラが悲痛な叫びを上げた。
冥闘士が新たに血の池へと二人の白銀聖闘士を投げ込んだのだ。
そしてテイレシアスは血で汚れた指先を舐める。
その様子は全く下卑た感じがしなかったが、残された聖闘士達の怒りと恐怖を誘うには十分すぎた。

「き…貴様…！」

ユバルホークは頭に血が上り、声を荒げた。テイレシアスは相変わらず涼しい態度だった。その物言いは冷酷だった。

「白銀（シルバー）では、俺の相手にはならないと言ったばかりだろう。それなのに向かってくる方が愚かだな。フッ…まあ、こちらは手間が省けて助かる」
「…っ…！！！」

ユバルホークが握りしめた拳の強さが感情の激しさを物語る。

「薄膜の防御壁（ミラージュスフィア）はあくまで外部からの‘攻撃’を防ぐだけ」―それに感づいたユングビィは、自分は‘フォーティルアルフィフトゥ

ラ，で防御壁を出させて相手の注意を引きつけておき、エリンナが膜内部に入り相手に接近して，サンダークロウ，を喰らわせる―という連携攻撃を実行しようとした。二人の力を持ってすれば可能で決して悪い作戦では無かった。

ユングビィの考えは当たっていた。しかし、相手の強さは想像以上だった。

まさか、いくら結界によって彼女が弱体化しているとはいえ、あの至近距離でエリンナの全力を尽くした電撃をモロに受けて無傷だとは、誰が思っただろうか…

そしてその直後光速で繰り出された風の「剣の舞」を、またしても回避する術はなかったのだ。

「先生、こいつはやっぱり強すぎます…今回はこいつを倒すのが目的じゃないし、撤退した方がいいと思います…」

ユバルホークを落ち着かせようとしたのはライノだった。平静さを装ってはいるが、声が僅かに震えている。

「その方が利口だな、一角獣座（ユニコーン）の小僧」

答えたのはテイレシアスの方だった。

「だが、俺がパンドラ様から賜った仕事は、貴様らを全員血祭りに上げる事…首の皮が繋がったままで帰す訳には行かないのだ」

テイレシアスは倒れているレイファートに歩み寄り、その首を握り潰すように掴んで持ち上げた。

「ぐ…ううっ…」

「手始めに大熊座（ベアー）のデカブツから血祭りに上げ首を捩じ落として

くれようと思っていたが、こちらの方が楽そうだな」

苦悶の表情で、全身から血を流しながらうめくレイファートの首に手刀があてがわれる。

「さあ、今度は‘ヴァニティ・スリット’でこの首を落としてやろう！」

「させない！！！」

叫び声と共に一閃、光の筋がひらめいた。

「！？」

テイレシアスの眉間部分に黄金の矢が命中した。テイレシアスはよろめいて後ずさり、その手がレイファートの首から離れた。

ドサリとレイファートが崩れ落ち、冥衣のマスクが矢が貫通したまま軽い音を立てて地面に落ちる。

冥闘士の白皙の顔の中心を赤い筋が鮮やかに流れていた。

「…射手座（サジタリウス）…貴様…！」

テイレシアスは顔を歪め、憎々しげに言った。その見据えた先には黄金の弓を構えたシルヴェラがいた。

地面に転がっているマスクに刺さった矢が、意思を持っているかのように独りでに空を切って持ち主の手元に戻って来た。シルヴェラはそれを番え直し標的を狙い定める。

「もう一発、同じ場所に当てるぞ…！」

「くっ…」

シルヴェラの牽制でテイレシアスは下手に動く事が出来なくなった。マスクを被っていても結構な威力だったのだ、今剥き出しになっている眉間部分に矢が飛んで来たらただでは済みそうに無い。―射手座（サジタリウス）か、子供だと思って甘く見ていたが、大変な間違いだったようだな。―

「ユバルホーク、ライノの言う通りだ。今回はこいつを倒すのが目的じゃない…撤退しよう。それに、聖闘士の数も足りていないのに、三人も白銀聖闘士を死なせるわけには行かない。俺がこいつの相手をするから、三人を助けて先に聖域に戻ってくれ！」

シルヴェラの思いがけない言葉に、青銅聖闘士二人は口々に反論する。テイレシアスでさえ、意表を突かれた様子だった。

「隊長が、ここに残るって言うんですか！？」
「隊長が強いのは分かってますけど…でも…」
「大丈夫、ちょっとした時間稼ぎだ。みんなが安全に戻れるようにさ。俺は足に自信があるから、後から行くよ」

年少の黄金聖闘士の決意と覚悟が溢れ出た力強い言葉に、ユバルホークは冷静さを取り戻した。―そうだ、教皇が認められた位だ、シルヴェラだって年若いとはいえ立派な黄金聖闘士。自称だが、「隊長」の名は伊達じゃないな。ユバルホークはしっかりと頷いた。

「分かった。お前に任せるが…無茶な真似だけはするなよ！」
「もちろん！」

ユバルホークは言い終わらない内に足をはやらせ、一気に血に塗れた三人の白銀聖闘士達を体重をものともせずに背中と両腕に抱えて戻ってきた。右腕のエリンナをライノに、左腕のユングビィをア

ンキセスに預け、背負ったレイファートをそっと自分の両腕に抱きかかえる。

「ううっ…申し訳ありません…」

「喋るなレイファート…傷に響くぞ…」

殆ど残されていない力を無理矢理絞り出して言うレイファートを、ユバルホークは低い声で静かに労った。

「…シルヴェラ、俺達は行く。後は任せたぞ！」

「隊長、お願いします！」

「ああ！！！」

ユバルホークの合図で三人が陰鬱な闇の外へと走り出したのを、矢を相手に向けた姿勢のままシルヴェラは振り返らなかった。

戦略的撤退―？　Strategic Retreat ―？

「フッ、まあいい。あの白銀聖闘士（シルバーセイント）共は、どの道助からんだろう…それに、邪魔者がウヨウヨといるよりは、貴様一人がこうして残ってくれた方がやりやすい」

テイレシアスは聖闘士（セイント）達が陰鬱な空間の外へ走り出すのをちらりと見やると、自分のマスクを拾い上げて被り直した。その視線は決して矢を番えたシルヴェラから離れない。

「俺達全員を血祭りに上げるのが仕事じゃなかった？」

シルヴェラの挑発をテイレシアスはさらりと無視した。

「果たして時間稼ぎにもなるかな？むざむざやられてさらし首になるのも恥だろう」

「そんなつもりはないね。そして長々と相手をするつもりもね…！」

景気良くシルヴェラは答え、腹に一物あるようににやりと笑う。

「そうか、それならば行くぞ！」

テイレシアスが冥衣（サープリス）の鋭角的な翼で空を切り、旋回しながらシルヴェラに突進する。

遺跡に転がっている石や瓦解した柱などが、暴風で巻き上げられ四方八方に吹き飛ばされる。

しかしシルヴェラは動じない様子で、身軽に跳び上がると風に逆らって聖衣の翼で羽ばたき、テイレシアスの拳を、さらにはがれき

を華麗に躱す。

「貴様、動けるのか！？」

「そのための翼さ！」

瞳孔を拡大させて驚くテイレシアスにシルヴェラが言い放つ。

‘空中戦では８８の聖闘士（セイント）中最強’と言われるシルヴェラは、実際最初にテイレシアスが仕掛けてきた時強風で動けなかった訳ではない。相手の動きを見ていたに過ぎなかったのだ。白銀聖闘士（シルバーセイント）三人が倒されるのも傍観していた訳ではない。

シルヴェラは宙返りをすると、テイレシアス目がけて矢を放つ。

「‘ファントムアロー’！！！！！」

一本の黄金の矢が無数の矢の雨に変わり、テイレシアスの頭上に降り注ぐ。

テイレシアスは飛行しながら両腕を唸らせる。

「こざかしい…‘ヴァニティ・スリット’！！！」

「！！？」

先刻二回繰り出されたものとは比べものにならない程尖鋭な大気の乱舞が無数の矢を一本のみ残して切断し、霧散させた。その斬撃の余波がシルヴェラにも襲いかかる。

「うぐわぁぁぁーーーーー！！！！！」

流石に最高の強度を誇る黄金聖衣（ゴールドクロス）なだけあって傷一つ付かなかったが、マスクで覆い切れていないシルヴェラの左目が切り裂かれた。

左半分の視界が紅で閉ざされ、激痛に支配される中、手元に黄金の矢が何事も無かったかのように烈風を裂いて戻ってきた。

「射手座（サジタリウス）、何をしている。もう片方の目も貰うぞ！」

一瞬の静止の間に、テイレシアスが自分の正面から突撃してくるのがシルヴェラの右目に映った。

利き目である左目より視力の落ちる右目は、片割れが犠牲になった際の血飛沫が飛び込んできて更に霞んでいる。―

―シルヴェラは、本能的に、そして此処に残ると言った自分の責任の為に動いた。

「右目はやらないぞ…！」

「貴様…」

躱しきれないと読んだシルヴェラは、弓矢を捨てて自分の両拳で相手の拳を止めたのだ。

テイレシアスのナックル部分に血が涙のように落ちた。

「よく止めたな…しかし武器を捨てていいのか？」

「問題ないさ…！」

シルヴェラの声は確固たる自信に溢れていた。

なんと、放り投げられた筈の黄金の弓が地面から浮き上がり、それ自体で矢を番えているのだ。

矢先はテイレシアスの心臓に焦点を当てている。

「どういう事だ…貴様は念動力（サイキッカー）使いか？！」

テイレシアスは後方に下がってシルヴェラと距離を置くが、弓矢

は自動的にその仕留めるべき対象を正確に狙う。何者かが弓を引き絞っているかのように。

「射手座（サジタリウス）の黄金の弓矢には、前聖戦を戦い抜いた先代の魂が宿っている…先代が、俺を助けてくれているんだ！」

「先代の魂だと…馬鹿な」

「そうさ。俺は一人じゃないって事さ―、ファントムアロー，！！！」

放たれた一本の矢が流星群となってテイレシアスに飛来する。

テイレシアスはそれを鼻で笑い微動だにしようとしない。

「何かと思えば、またそんな子供騙しか。これが一本を除いてあとは幻影に過ぎないという事は一分かりきっている！」

見切った黄金の矢の実体をテイレシアスは右手で鷲掴みにした。

しかしシルヴェラはふっと笑う。

「今度は、どうかな？」

「！！！」

シルヴェラの言葉の直後、テイレシアスは閃光の嵐に飲まれた。

冥衣のあらゆる部位が光の矢に貫かれて軽く破裂音を立てる。

「ぐっ…一回目はこれを当てる為だったという訳か…」

「まあね」

してやられたと言わん顔のテイレシアスを見ながら、シルヴェラはいつの間やら手にきっちり収まるように戻ってきた黄金の弓と、固く握りしめていた筈のテイレシアスの左拳をすり抜けて来た黄金

の矢を掴んだ。
しかしながら彼はそれを再び構える事はせず背中にしまい、相手に背を向けないようにしながらどんどん闇と光の境界へと身を寄せていく。

「逃げる気だな、射手座(サジタリウス)」
「言ったように、今回はあんたを倒すのが目的じゃないし、長々と相手をする気もない。みんなももう安全圏にいると思うし、撤退させてもらうよ…」

シルヴェラは一際大きく後方に跳び上がると、翼をはためかせたままその姿を敵の目の前から消した。

「シルヴェラ様、その目…」
黄金聖闘士(ゴールドセイント)最速を誇る足を酷使して聖域に辿り着くと、シルヴェラを出迎えた入り口を警護する雑兵達が一様に彼の深紅に染まった左目に視線を集中させた。

「斬られたんだ。もしかしたら、失明するかも…」
シルヴェラはうなだれた。視力を失うというのは、射手(アーチャー)にとって致命的な事であるし、何より実質初めての戦いでこうなるとは思っていなかったという甘えが彼を苦しめていた。

「ユバルホーク達は？俺より先に着いたよね？」
「ええ、十二宮を登って行かれましたよ」

そう言われ、シルヴェラは遠くに見える火時計を見た。十二分割された円の一ますずつは、それぞれ黄道十二宮の宮を表している。今はその三ますまでに青い炎が灯っているが、第十の宮・摩羯宮の火の勢いも落ちてきている。―だいたい十時半を回った辺りだろうか。―

「分かった、俺も行く」

「お待ち下さい。そんな目で大丈夫なのですか?!本当に失明してしまいます…」

「仕方ないよ…教皇の間に行くのが先だ」

雑兵達の心配な目をよそにシルヴェラ達は十二宮の石段へと向かって行こうとするが、それを止める者があった。

「そんな目で教皇に謁見するのは失礼というものだ、シルヴェラ」

雑兵達の背後から、黄金聖衣(ゴールドクロス)を身に纏った長身の男が現れた。振り返ってその姿を目にするや否や、雑兵達は深々と頭を下げる。

「ゼテス…どうしてここへ」

当惑するシルヴェラに、ゼテスはやや素っ気なく水の入った小瓶と丸めた白い布を投げてよこした。

「カライスからの預かり物だ。その水で目を洗い保護しろ。そうすれば直ぐに治る…さっさとやれ」

ゼテスはそれだけ言うと身を翻して去ってしまった。一瞬何の事か分かりかねたシルヴェラだったが、カライスが自分たちの為に用意してくれた物だと分かり、早速小瓶の栓を抜いた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2929y/

遙かなる聖戦

2011年12月11日10時48分発行